

[北方林業研究室]4. トドマツの天然広葉樹下木植栽試験

青木, 尊重
九州大学農学部附属演習林 : 助教授

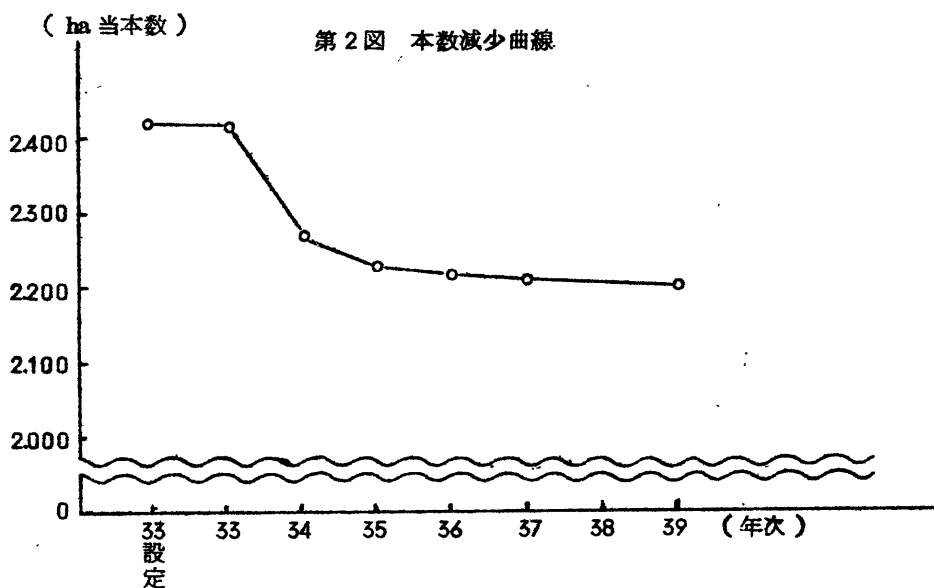
中島, 誠
九州大学農学部附属演習林 : 助手

今田, 盛生
九州大学農学部附属演習林 : 教務員

<https://doi.org/10.15017/1456200>

出版情報 : 演習林研究経過報告. 昭和39年度, pp.80-82, 1965. 九州大学農学部附属演習林
バージョン :
権利関係 :





Ⅳ 今後の見通し

今後もあくまで天然広葉樹二次林に何ら人工的な操作を加えることなく、自然のままに放置した場合の林分構造の推移を観察測定することによつて、その林分の成立を分析し、将来2次林作業の重要なデータとしたい。

4. トドマツの天然広葉樹下木植栽試験

青 木 尊 重 中 島 誠
今 田 盛 生

Ⅰ 研究の目的

幼令時において、晩霜、寒害などに対する抵抗力の弱いトドマツを、これらの被害から保護するため、天然広葉樹林に下木植栽した場合の上木のうつ閉度および間伐度と保護効果並びに成長との関係を究めようとするもの。

Ⅱ 方法および経過

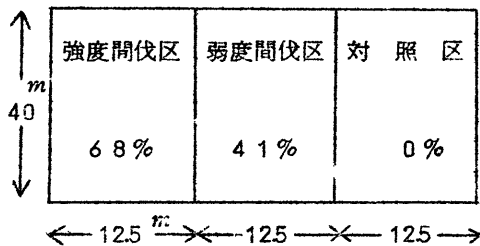
昭和34年10月に第24林班内の広葉樹2次林(約30年生)内に5.41haのトドマツの下木植栽を行つたが、その際、この造林地内に0.1ha(40m×25m)の試験地を設定

した。この下木植栽は約1m巾に筋状に上木を間開し、ha当2,500本のトドマツを下木植栽した。

以後毎年成長量調査を継続し、昭和38年4月に従来のプロットを2分し、さらに、このプロットに隣接して40m×12.5mの1プロットを設定して対照区とし、その際、上木の間伐により、うつ閉度を操作して次のような試験地にあらためた。

試験区	本数間伐率	うつ閉度
強度間伐区	68%	29.8%
弱度間伐区	41%	38.5%
対照区	0%	46.6%

なお、試験地を図示すれば次のとおりである。



うつ閉度操作後2年間放置して本年4月12日、第4回目調査の結果は次のとおりである。

第4回 調査 結果

	全本数	平均樹高	枯損木	枯損率	寒害木	寒害率	虫害木	枯損・寒害率
	本	cm	本	%	本	%	本	%
強度区	99	47.7	4	4.0	15	15.2	0	19.2
弱度区	86	50.2	10	11.6	1	1.2	1	12.9
対照区	75	53.9	7	9.3	4	5.3	0	14.7

Ⅱ 考 察

- (1) 成長量についてはうつ閉度が強い程、成長が良好であるという結果が出ている。いずれも約3cmの差がある。
- (2) 枯損・寒害率は弱度即ち41%の間伐率すなわち、38.5%のうつ閉度の場合が最も低いのであるがいずれも今後の経過を注目したい。
- (3) 従来、うつ閉度により分画していたが事業に应用する場合の応用性を考える場合、うつ

閉度で処理することはやや困難であるから、今後は間伐率を基準にすることにした。

5. ヤチダモ人工造林木の側枝抑制試験

青 木 尊 重 中 島 誠
今 田 盛 生

I 研究の目的

ヤチダモの人工造林地において、ヤチダモ以外の萌芽木を適当に整理残存せしめ、ヤチダモとの混交林を造成することによつて、ヤチダモの側枝の発達を抑制し、枝下の高い、直通な利用価値に富んだ造林木を育成しようとするもの。

II 方法および経過

昭和35年10月25日に6林班は小班内のヤチダモ人工造林地(昭和28年度植栽)内に試験地を設けた。この造林地には造林木であるヤチダモ以外のミズナラを主とする萌芽木が発生伸長して、ヤチダモとの混交状態をなしているが、この地域内の比較的立地の均等した区域を選定し、混入している萌芽木を整理し、残存萌芽木の立木度を異にする5区を次のように設定した。

	第 I 区 (皆伐区)	第 II 区	第 III 区	第 IV 区	第 V 区 (対照区)
20 m	0 本	3,500 本	5,000 本	7,000 本	20,000 本
	25 m				

〔注〕 1)プロット内数値は残存萌芽木本数

2)残存木本数はHA当換算

昭和38年4月26日の第1回目測定につき本年4月15日に第2回目の測定を実施した。その結果は次のとおりである。なお、測定方法は各区につき各々10本のヤチダモ標準木について20cm以上の枝の本数および長さを測定するものである。この場合、側枝とはもちろん、樹幹より直接発生しているものに限定する。